

●咽頭結膜熱

平成27年の咽頭結膜熱の報告数は4,640例、平成26年の5,825例に比し、1,185例、20.3%の減少を示した。定点あたり報告数は平均0.44で、平成26年の定点あたり報告数0.56より21.4%減少した。

平成27年大阪府13疾患総報告数156,006例の3.0%を占め、多い順では第9位であった。平成27年全国の咽頭結膜熱の報告数は72,150例で、全国13疾患総報告数の第10位であった。

週別の定点あたり報告数では、第17週(4月)に0.4を、第19週に0.5を超え、第22週(5月)には0.8を超えて、ピークを形成した。わずかに減少して、第25週・第28週には再び0.8を超えた。その後わずかな増減を繰り返しながら、ゆっくりと減少していたが、第47週(11月)に0.5を超え、第50週(12月)0.6を第51週に0.7を超えて、小さなピークを形成した。

月別では6月の732例が最も多く、次いで8月の540例、12月の452例、11月の447例、5月の435例、7月の418例と続く。例年は夏型感染症であるが、27年は夏季に加えて、11月、12月にも多かった。

年齢別では1歳児の1,149例が最も多く、次いで3歳児の680例、2歳児の605例、4歳児の579例、5歳児の428例、0歳児の408例であった。0歳から5歳までの就学前児童の報告数3,849例は全報告数の83.0%を占める。乳幼児期の感染症と言える。

ブロック別では、③北河内797例が最も多く、次いで⑦泉州581例、⑤南河内510例、④中河内504例、⑪大阪市南部447例の順に報告数が多い。

ブロック別の定点あたり報告数の年平均では⑤南河内0.60が最も高く、次いで③北河内0.56、⑦泉州0.50、④中河内・⑨大阪市西部0.48の順に高かった。

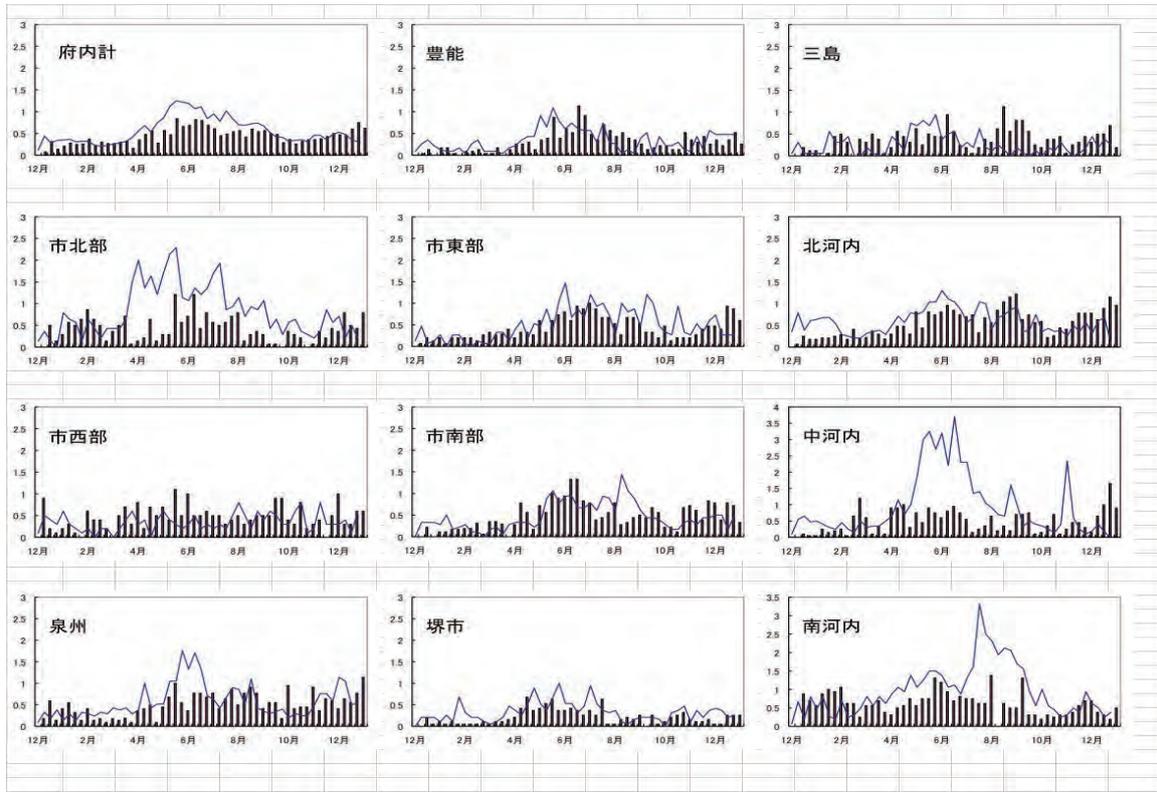
ウイルス検出は64検体中50検体が陽性、陽性率は78.1%であった。検出ウイルスは多い順にアデノウイルス(Ad)3型が22件、Ad2型が12件、Ad4型が7件、Ad5型が3件、ライノウイルス型不明が2件、Ad型・Ad37型・Ad型不明・RSウイルス型不明が各1件ずつであった。

(文責：信田)

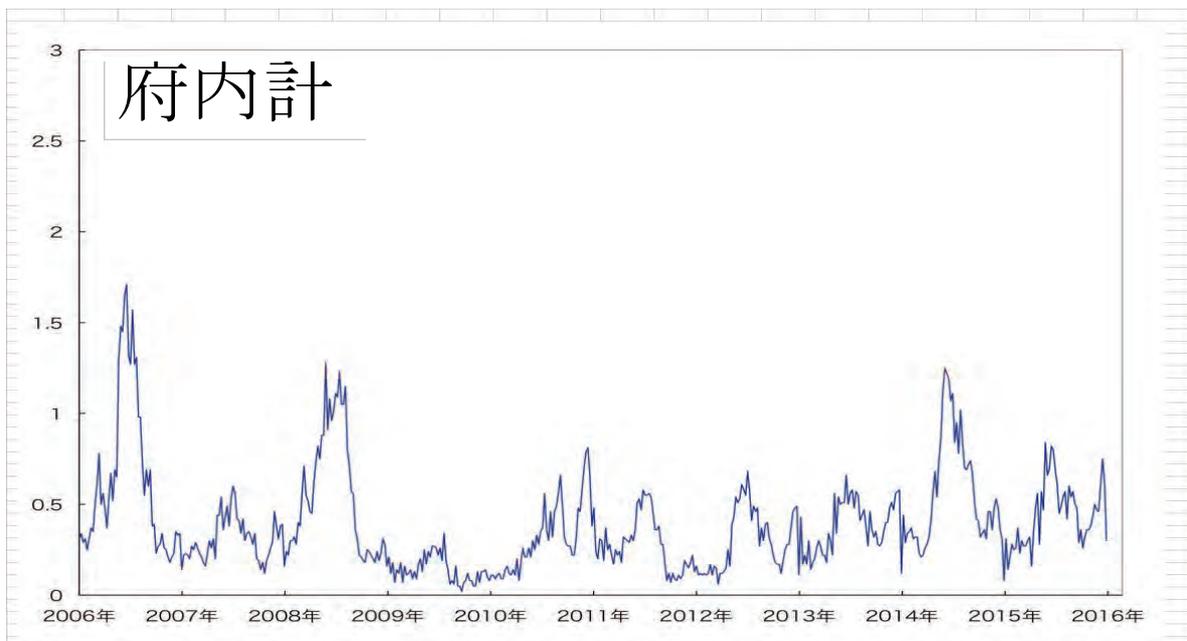
咽頭結膜熱

線 (H26年第1週～第52週)

棒 (H27年第1週～第53週)



線 (H18年第1週～H27年第53週)



●A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平成27年のA群溶血性レンサ球菌咽頭炎の患者報告数は23,081例で、前年比10.9%増、総報告数（小児科・眼科定点報告対象疾患）の14.8%を占めた。定点あたりの報告数の年平均は2.18で、順位は第3位であった。

全国集計では401,274例の報告で、前年比31.8%増、総報告数（小児科・眼科定点報告対象疾患）の16.5%を占めた。定点あたりの報告数の年平均は2.04で、順位は第2位であった。

週別（月別）の定点あたりの報告数の推移では、第4週から第6週（1月～2月）、第8週から第13週（2月～3月）、第15週から第18週（4月）、第20週から第29週（5月～7月）、第46週から第52週（11月～12月）で2.0を超え、ピーク値は第24週（6月）の3.73であった。初夏と冬期に二峰性のピークを作る傾向は、例年と同様であった。

全国集計では、第4週から第18週（1月～4月）、第20週から第29週（5月～7月）、第43週から第52週（10月～12月）で2.0を超え、ピーク値は第24週（6月）の3.65であった。

年齢別患者発生数は、5歳児の3,179例が最も多く、以下4歳児（3,161例）、6歳児（2,726例）、3歳児（2,489例）と続き、3歳児から6歳児で全体の50.1%を占めた。この割合は例年とほぼ同様であった。

定点あたりの報告数年平均の上位5ブロックは、⑤南河内（3.04）、④中河内（2.64）、⑪大阪市南部（2.51）、⑦泉州（2.42）、③北河内（2.23）の順であった。

ブロック別・週別定点あたりの報告数の上位5ブロックは、⑤南河内（第24週、6.69）、⑤南河内（第51週、6.56）、⑪大阪市南部（6.22）、④中河内（第18週、5.80）、⑤南河内（第27週、5.63）の順であった。

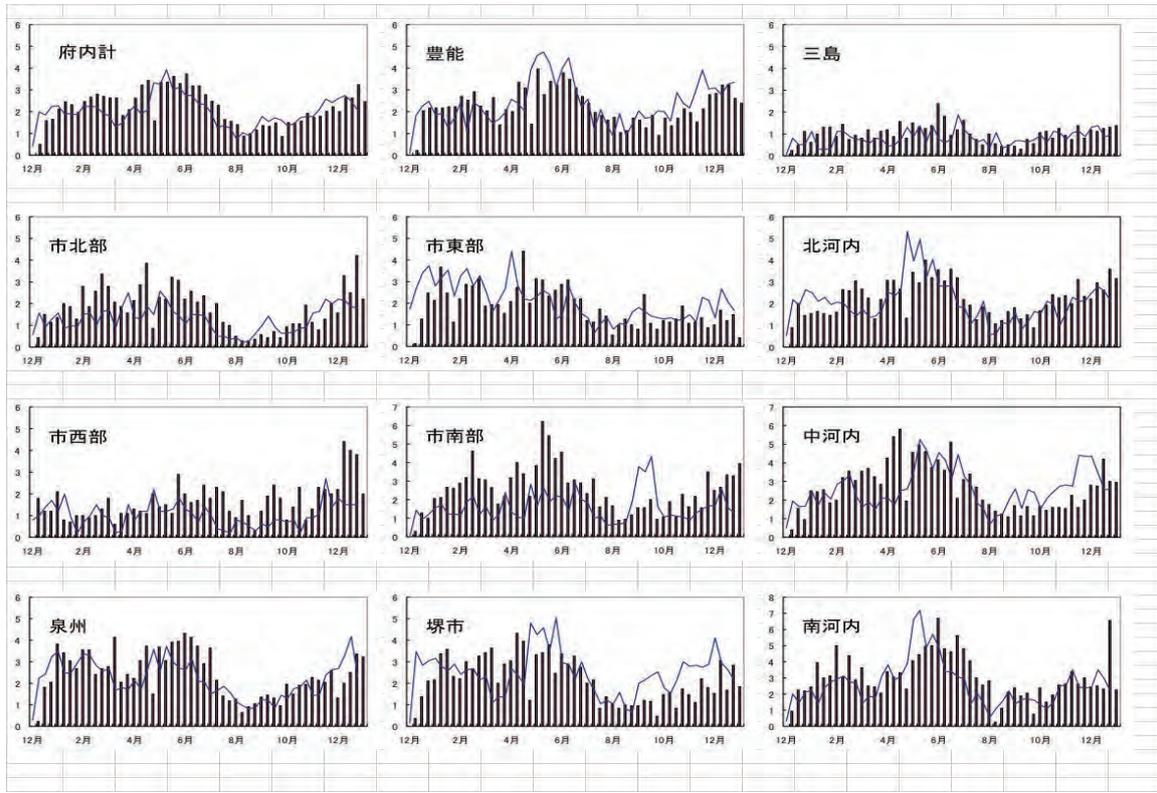
ブロック別年平均報告数、週別報告数ともに⑤南河内での報告数が目立っていた。

（文責：八木）

A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

線（H26年第1週～第52週）

棒（H27年第1週～第53週）



線（H18年第1週～H27年第53週）

